

# 小田原史談

第109号  
発行所 小田原史談会  
小田原市南町2-3-21

## 北条後氏秘話

### 北条氏邦と氏房の最後 ①

中野敬次郎 執筆

(一)北条氏邦と氏房の最後  
天正十八年(五〇)の小田原戦役後の北条氏邦の後半世も哀れに満ちている。氏邦は北条氏康の三男であるが、永祿、天正の頃は武蔵(埼玉県)の鉢形、箕野(群馬県)沼田城を兼有して華々しい存在の人であった。

有名な鉢形城は天文年中までは、管領山内上杉氏の四家第一と数えられた。秩父二郎畠山重忠の後裔の名族藤田家の居城であった。天文十七年(天正)四月の川越夜戦で北条氏康が、山内、扇谷の両上杉を破ったから、城主藤田康邦(初め重利)は時勢を考えて北条

氏に属することになり、更に北条氏の親戚になって一家の安泰を計ろうと、氏康の三男氏邦を養子にむかえ、娘の大福御前と結婚させて鉢形城を氏邦に譲ったのである。氏邦は初め通称を氏吉と云ったが藤田左衛門佐康那の養子となったので、秩父郡岩田城(天神山城)に在城して秩父新太郎氏邦と名を改めた。間もなく養父藤田康邦が鉢形城を彼に譲って近くの用土城に退いて、用土新左衛門と名乗るに及んで、氏邦は鉢形城に入って北条姓にかえり北条安房守氏邦と称して従五位下に叙せられた。天正十八年の小田原戦役の際には鉢形城には重臣達

を置いて守らせ、自らは手勢一千騎を率いて三月二日に小田原城に馳せ参じて、籠城軍に加わったのである。しかし、この戦争に於ける氏邦の動静についてはあまりよく言われない。「北条五代記」(小田原記)でさえ、「安房守氏邦元来武勇勝れざる人なり」と極言している。彼は書道の大家で「管領九代記」「関八州古戦録」などに「手跡に名を得ている程で、現存する彼自筆の文書は筆勢雄大で一族中群を抜いているが、性格は弱い人で武將的でなく、むしろ文化的な人であったらしい。

小田原籠城戦に北条氏一族の代表者が皆小田原城中に集まったのに、氏邦だけは小田原に来なかつたと言ふ説さえあるくらいである。この説では豊臣方の来攻に備えてこの年一月小田原城中で大評議が行われた際に、氏邦の出撃説と北条方家老松田憲秀の籠城説とが

対立し、出撃説が押えられて籠城に決定したが、この評定以来、氏邦は松田憲秀と不仲になり、それで籠城に参加しなかつたのだろうと言ふのである。事實は氏邦は小田原籠城軍に参加しており、これは確実であるが、ただ落城以前に、彼一人だけ小田原城を去っているのも事実である。この間、鉢形城では留守居の重臣達が侍分三百騎、雑兵二千七百人、それに沼田城から応援に来た三百人を合わせて合計三千三百人で城を守っていた。これに対して豊臣方は北陸軍の上杉景勝、前田利家、真田昌幸の三將が三万の軍勢を持って城を囲み攻撃したが、城は古来險要を称せられる天然の地形と城兵の堅守によって、幾度かの猛攻にも城は容易に陥らなかつた。然し籠城が長びくうちに食糧が欠乏し、更に攻囲軍も五万人に増強されて連日の猛攻を受け、また逃亡者が続出して次第に戦力を失い六月十四日、ついに落城したのである。

小田原に籠城中の氏邦は鉢形城から危急の注進が次々ともたらされたので、妻子を残している鉢形城に心引かれたのか、小田原籠城の決意を失い、腹心の人々

をつれて遂に小田原を脱出したのである。道を秩父の山中にとり、ようやくにして彼の所有の一城である天神山の岩田城に達したが、その時はすでに鉢形城は落城し、妻子の行方も知れなかつた。氏邦は仕方なく岩田城に暫らくとどまった。

寄手の軍はそれを知り、氏邦を降伏させようと前田利家が鉢形城下の氏邦菩提寺の正竜寺の住職、長得和尚と、同寺の香英という禅僧を使者として、天神山に向かわせ氏邦に降伏を説得せしめた。氏邦は初めは説得に応ぜず「宗家の危急に瀕して吾れ独り生を欲せんや。願わくば士卒に代り自裁せん」と言ったが、今はどうにもならず旧領安堵と士卒の生命をゆるすことを条件に降伏するに至つたのである。そして直ちに正竜寺に入って剃髪し、宗青と号した。この時、家臣町田左近秀延も主人に従って剃髪入道し枯慶と称したのである。

この時はまだ本城小田原の落城以前で、名城鉢形城の落城と氏邦の降伏はまことにあつけない一幕であつた。それ故「小田原記」の鉢形城降参の事に「安房守氏邦元来武勇勝れざる人なりしかども、一門と云い、思量あるべきに甲斐なく降参し、城下の正竜城に入つて出家入道し、沙弥の姿になり給う」と鼻白んでいる。

(二)氏邦夫人大福御前自害さて、氏邦は落飾剃髪後はどうなったのであろうか。正竜寺に入って世捨て人になつても北条宗家の四代氏政の弟であり、五代氏直の叔父であるから、戦後秀吉がこれをそのままに捨て置くわけはなく、降伏の時の因縁で前田利家に預けられる身となつた。利家は加賀に帰国するとき氏邦を金沢につれていった。以後前田家の被護をうけることになり寂しい日日を北陸の流転地で送つた。

氏邦の夫人を大福御前という。この人は前記したように、元の鉢形城主藤田左衛門佐康邦(藤源院天山祖繁定門、弘治元年九月十三日卒)の娘であつて、氏邦を聲に迎えて結婚したのである。母(宝林院嶺梅芳春大姉、永祿五年四月二十九日卒)は康邦の正室で、西福御前と言われた人であつた。

鉢形城が豊臣方に囲まれたとき夫君氏邦は、小田原に行つて北条本軍に参加しているの、夫人は城中に

福丸を守護しながら、籠城していた。然し六月十四日の落城を迎える前夜、家臣の前田越前守武士らの奮戦によって血路を開き、城を脱出して辛うじて生命を全うしたのである。

大福夫人は早くから賢夫人として聞こえていたが、文武に教養が高く特に難刀は名人の域であったと伝えられている。

ところが、戦い終わって夫妻が無事に会見できたのもつかの間で、夫君は落飾して前田家の預かり人となり加賀に去ってしまったので、彼女も父の開基した鉢形城下の正竜寺(寄居町)で尼となり、朝夕の励行の外に他事ない生活を続けること数年に及んだ。だが夫君を初め一族旧縁の皆浅ましくなった悲しみと、孤独の寂しさに堪えられなくなったのか、一日傍に人なき折を見て、正竜寺の一室で自尽して相果てた。

古記に「見聞せし人哀憐せずといふことなし」と述べている。時に文禄二年(一五九三)五月十日のこととで烈女の最後というべきであった。

大福御前の墓は正竜寺の墓地にある。また同書には御前の遺品というものを多く蔵しているが、その中に短刀。平造りにて梵文二

字及俱梨伽羅龍を彫り。大福御前此刀を以て自殺せしとなり。  
○香炉。古染付綱の手香炉なり。これ大福御前所持せし品なり。  
○古錦割手。同人夜具の切なりという。

など見るべきものが多い。大福御前自書るときは、夫君氏邦こと沙門宗青はなお金沢で生きていた。加州流転後の氏邦の生活は不明であるが、決して明るいものでなく、孤影悄然たるものであったに違いない。そして慶長二年(一五七五)八月八日彼の地で歿した。そして遺体は茶毘に付され遺骨が正竜寺に送られて来たので寺では、夫人大福御前の墓の側に埋葬して、墓碑を建てた。いま氏邦夫妻の五輪塔の墓石は仲良く肩を並べて建っているが、詳しい由緒を聞くと誠に哀れである。法名は昌竜寺殿天室宗清居士。

氏邦の歿年齢は明らかでないが天文十二、三年(一五四二―一五四三)の生と推定されるので、死んだ慶長二年(一五七五)は五十四、五歳であったと思はれる。

(三)北条氏邦の子供達  
氏邦の子供については、一般には実子がいないとし、兄の氏政の子新太郎氏定を養子に迎えたといえられて

いる。  
この氏定は天正十八年小田原合戦のとき養父氏邦と一切の行動を共にし、氏邦の小田原城脱出のときもこれに従って鉢形に帰り、正竜寺に入って父と共に出家した。

氏邦は加賀に預けられたので、彼は京都に行つて、一時紫野の大徳寺の喝食となつていた(秩父通志)が、のち加賀の前田利長が同情して呼び寄せ数石の采地を与えて寄人分とした。このため岩田、富永などの旧臣も集まり一時安堵を得たが、この人は短命で、またその子の氏時(内記)が幼年て死んでしまつていたから、折角、加賀に落ち着くことができた家系が絶えたのである。

然し、実際は氏邦には実子があつたらしい。氏邦の實子として諸種の記録にあらわれるものには「新編武蔵風土記稿」の男衾郡鉢形城跡の項にあらわれる光福丸と、同誌の男衾郡東国寺の条に出てくる東国丸と、正竜寺に所蔵する「氏邦文書」に見える亀丸の三人がある。

この三人が別々の人であるか、同一の別称であるかが明らかでないが、まず光福丸について言えば、鉢形城落城の寸前に氏邦正室大

福御前と一緒に城を落ちたと記録にある少年がそれで光福丸という名からして、大福御前の生んだ子であると思われるが、城外脱出後のことについては、落行先も経歴も一切記録にはあらわれてこない。東国寺という禅寺。東国丸のことについては、金車山泰平院との寺記にある。同寺はもと称して秩父郡吉田郷にあつたが、北条氏邦の子息の東国丸が天正十一年(一五三三)月に早世したので、その菩提のために当所に移し東国丸の名をとって東国寺と改号したのであるという。同寺には東国丸の法号である東国寺殿雄山桃英の位牌がある。

亀丸については、正竜寺に所蔵する「氏邦文書」の中の左の二通の文面から推察されるものであるが、その文書には

「昨日亀丸致得度、鉄柱と呼候由令感候。可為如名事肝要にて候。仍熟柿一籠送之候。不備。九月晦日安房守 方丈江」

「約束之松茸給り見事歎入候。小僧骨折之由令感候。不備。九月七日 安房守方丈御許」とあり、「武蔵風土記」の説明にも「亀丸」というのは氏邦の子にて、当寺の弟子となりしものなり。文書中小僧と言ひしも

亀丸のことなるべし」と述べている。要するに文書の発給の年は明らかでないが氏邦が安房守を自称している点、また文面からして、鉢形落城以前のものと、亀丸という子息を正竜寺に入れて、その子が得度して鉄柱と名乗つたので、寺僧に将来を依頼しているものである。

東国丸は記伝にもあるようにすでに天正十一年(一五三三)に早世しているのであり、また氏邦がこの子の為に菩提寺の東国寺を営んで見ると、恐らく彼の最初の子供であつたと思はれる。従つて正竜寺に弟子入りさせた亀丸とは別人で亀丸は東国丸の弟になると思はれるが、何故に出家させているのか、恐らく正室大福御前の生むところではなく妾腹であつたのであろう。

前記したように光福丸は大福御前の実子と思はれるが、鉢形城脱出以後のことは一切不明である。或いは飯空の人物ではないかとも言われている。以上の点で考えられるのは、氏邦には実子が二、三人あつたが、或いは早世し、或いは早く寺入りをして、諸事情から家督を継ぐべき実子がないので、長兄氏政の子新太郎氏定を養子にして、家督

させることにしたのであろう。しかし、その氏定も京都、加賀と流転して短命に終わり、その子氏時また早世して、氏邦の系統は全く絶えることになるのである。

(四)氏政、氏直兄弟の末路  
氏邦は男七人兄弟であつた。みな北条氏全盛時代に誕生し、関東の覇者北条氏康の子息として生まれ、一門の繁栄類例なしと言われたが、天正十八年(一五七〇)の小田原戦役の結果、北条宗家は滅亡し一族の殆んどが、悲劇的な最後を迎えている。氏邦兄弟の最後について一括して述べると、長男氏政は北条家四代の太守として久しく全関東に威を振るつたが、最後は小田原の責任者として割腹で相果て、次男の八王寺城以下五ヶ城の城主であつた陸奥守氏照も兄氏政と同時に自刃する身となり、三男鉢形、箕輪花園三城の城主であつた安房守氏邦は詳しく前記したように、加賀金沢へと流転して、孤影悄然の最後をそこで終えた。

五男氏忠は佐野、足柄の二城主、左衛門佐であつたが、戦後は氏直に従つて高山山に行き、天野、大坂と転じた後、氏直の死後途方にくれた身を伊豆に流転し南伊豆の河津郷の一寺で終焉した。六男で小机城主右

衛門佐であった氏光は、氏直に従って高野に行ったがその年のうちに高野の山中で病死している。七男氏秀が政略の犠牲となって武田信玄の養子とし甲州に送られ、後また上杉謙信の養子として越後の地で非業の討死をしたことはよく知られている。

七人兄弟のうち四男の隼山城主、美濃守であった氏親だけが、運を開いて、北条氏直歿後、北条家を興し小身ながら大名になっていくのみである。

北条五代太守氏直兄弟の運命も叔父達と同様であった。

氏直は男五人兄弟であるが、氏直は戦後死一等を減ざられて剃髪して高野山に追放されたが、高野から天野、堺、大坂と転々として、最後に大坂で三十一歳の若さで病死した。或いは毒殺であるとも言う。

次男十郎氏房は九州唐津に歿し、三男の七郎直重は兄氏直に従って高野に入ったが、その後の消息は全く不明である。

四男新太郎氏定は前章に記したように叔父の鉢形城主氏邦の養子となったが、戦後落飾して京都大徳寺の喝食であったのを、養父の縁故によって金沢の前田利長に拾われて、一時加賀藩

で数千石を給せられる客分となったが、それもつかの間で若くして加賀で病死しているのである。

五男勝千代は小田原戦役真っ最中に小田原城中で生まれ、間もなく早逝した。

このような一族流転の中で、最も遠くまで行って死んだのが、次男十郎氏房であった。墓が唐津にある。

氏房は十郎氏房と称した岩槻城主で名族太田氏の家督を継いだので太田氏房の名で知られ、その勇猛は岩槻城の氏房と言われて高名であった。

太田氏は道灌(持資)以来関東の名族で、化条早雲の頃から北条氏と拮抗したが、美濃守資頼の頃から、この岩槻城を主城として、こゝに拠って北条氏綱、氏康と戦った。資頼の子が美濃守資時で、資時は弟の太田美濃守資正入道三案に家を譲っている。

三案は岩槻城に拠り堅くこの城を守り、しばしば北条氏康の軍を悩ませた。ところが三案の子大膳亮氏資は、北条氏康の太田氏懐柔策に乗せられ、また氏康は手をつくして三案を説きさしたので、遂に三案は隠居し嫡子源五郎氏資が大膳亮を名乗って家督をつぐことになった。そしてその夫人として氏康の息女(長林

院殿)を嫁にやり、北条氏が太田氏の後嫡となることに成功したのであるが、三案は、この後北条氏に謀られたとして岩槻を去って佐竹氏に寄居するに至るのである。

ところが、太田源五郎氏資と夫人長林院(氏政の妹)の間には女の子はあるが男子がなかったので、氏政はこれを幸として氏資卒去の直後の時を捉えて、次男の十郎氏房を入れて太田家を家督させ氏資の娘で「少将」と言っただのを十郎氏房と結婚させたのである。

以上が氏房が太田氏を家督して、岩槻城主となるに至る経過である。今も岩槻城下(岩槻市本町)に慈恩寺という天台宗の寺院があって、坂東三十三観音札所第十三番に当たる古刹であるが、氏房が岩槻城主時代に深く信仰して保護を加えた。

この寺には、天正十七年に氏房が寄進し、腹心の伊達与兵衛尉房実に铸造させた南蛮鉄の燈籠が堂前に現存する。その銘文の中に「爰ニ関東国ノ元帥ノ令弟北条氏房……」と誉めたたえている一句を見て氏房が城主であった頃の彼の権勢が想像できるが、これは天正十七年五月の奉納で、それから一年

足らずで小田原大攻防戦が展開したのである。

この年の一月の小田原城大評定に出席した氏房は、一旦岩槻城に帰り戦備を整えていたが、春寒の一日、氏房はこの慈恩寺の大本堂に重臣達を集め作戦会議を開いている。そして、主将

以下全軍で当城を死守するか、或は主将は精銳を率いて小田原本城の籠城に参加し当城は留守居兵で守るかを計る会議であったが、氏房は岩槻城を棄て城にすることに決した。

そこで氏房は手兵を率いて三月早々小田原に馳せ参じ、岩槻城は伊達房実、宮城美作守、妹尾兼延等が二千余人の兵をもって籠城したのである。氏房夫人小少将、氏房養母長林院(氏政の妹、氏資未亡人)などの家族はみな岩槻城中に置いていった。

北条氏房は猛将で、この時二十六歳、血氣旺盛の時であったので、北方方籠城軍中最も華々しく戦ったのは彼の軍隊であった。小田原北条軍の北方方面の主将として氏房は一万二千人の兵を指揮したが、五月三日と六月晦日の二回に亘って手だれの岩槻勢三百数十人を引き連れて、暗夜に陣に壮烈な斬り近みを行っ

たのは、太田氏房の夜襲戦と言われて有名で、小田原戦役中の籠城軍の中でも目覚しい働きの一つであった太田氏房の勇名は敵にも味方にも響いたのである。

その氏房が、何故に西辺唐津に流転するに至ったのだろうか。

九州肥前国唐津市のもと黒岩村と言った所に、瑠璃光山医王寺という曹洞宗の古刹があって、豊臣秀吉の朝鮮征伐で名護屋在陣のとき諸侯が戦捷を祈って書写した大般若経があるので知られているが、この寺の境内に氏房の石塔墓があつてそこを氏房山と呼んでいる。初めはその近くの竜泉院に葬られてあったのを、朝鮮征伐の直後に今の医王寺に改葬したものであるとい

う。小田原戦役の時の岩槻城は前記したような状態で留守隊二千余人が守っているのを、豊臣方は浅野長吉、

本多忠勝、平岩親吉、鳥居元忠等総勢二万人で包圍攻撃したのでから、防戦大いにつとめたが、五月二十日の日など、城内二千人中一千人が討死する有様で守りきれず、二十二日に降伏落城し氏房の妻小少将も捕虜となった。氏房はこの妻と

再会もできぬままに、氏直に従って一旦高野山に入つたが、彼のみは間もなく山を下り、寺沢志摩守に御預けとなつて、寺沢の所領九州唐津に行ったのである。

豊臣秀吉が彼の武勇を知って朝鮮征伐の名護屋陣に連れて行ったのであると言われている。併し何故か唐津到着後間もなく歿した。病死か変死かわからない。死んだのは文禄元年四月二十日、未だ二十八歳の若さであった。毒殺か暗殺か変死の匂いが強いのである。

香川政治載録 (この項おわり)

# 岡崎・吉良方面 史跡めぐり

香川 政治

主催 小田原史談会

日時 昭和五十六年十月 コース 第一日(十月四日、日曜) 四日(五日)一泊二日

日)午前七時藤棚前出発  
バス一台  
小田原―大井松田(東名  
高速道)―岡崎―岡崎城―  
中食―中食後市内見学―西  
浦温泉(富士見荘一泊)  
第二日(十月五日)  
西浦温泉―吉良の里―横  
須賀―豊川―豊川稲荷―小  
田原駅前解散  
前記のようなコースによ  
って一泊二日の史跡めぐり  
を計画したところ出発当日  
が県民祭やその他いろいろの  
行事と競合した関係で参  
加者少なく参加人員二九名  
であったが計画通り実行す  
ることとし藤棚前を予定通  
り出発大井松田インターよ  
り東名高速道を秋晴れの好  
天の下一路西進途中日本坂  
パーキングエリアにて小憩  
再び快適のドライブを続  
け岡崎城趾に早くも十時四  
十五分到着岡崎城内の貴重  
な珍品の陳列を見学十一時  
三十五分車上の人となり第  
一日の中食地、岡山城の北  
東に在る真福寺に向う。十  
一時五十分真福寺到着、岡  
山地方で有名な真福寺の竹  
の子料理(食器類は全部孟  
宗竹を利用し各食器の型に  
工作)膳の上はそれこそ竹  
づくみで大変珍しい料理  
で味も好し一同舌鼓を打ち  
一同大喜び、三年位前から  
営業を開始したそうである  
方面の観光バスも二―三台

来ていた。  
寺の周囲は孟宗竹の藪に  
囲まれている。十三時に真  
福寺を後に次の見学地伊賀  
八幡宮に十三時十五分着社  
殿な建造物を見学十三時三  
十五分出発次の大樹寺十三  
時五十分着山門、鐘楼、多  
宝塔何れも重要文化財、廟  
所等見学、ただ残念であつ  
たことは当日仕職不在の為  
本堂に入ることが出来ず襖  
絵などの重要文化財が拝観  
出来なかつたのが心残りで  
あつた。  
十四時三十分寺を辞し、  
小田原大久保氏の故地、大  
久保家の菩提寺妙国寺(岡  
崎市上和田)に行く予定で  
あつたが、道路事情悪くバ  
スを下車徒歩二キロという  
ことでこゝを割愛し、予定  
を変更して蒲郡より三ヶ根  
スカイラインをドライブし  
三河湾国定公園の美しい海  
岸線を眼下に知多半島、渥  
美半島を遠望しながら標高  
一三二〇級の三ヶ根山の尾  
根を快適に徒走少しの間自  
然美の景観を満喫しながら  
幡豆町に下り国道二四七号  
線の道路沿いに中風除けで  
有名な幡豆観音(妙信寺)  
に立寄り本堂に参観住職の  
ユーモアたっぷりの説法を  
拝聴、寺を辞し今晚宿泊の  
西浦温泉富士見荘に向う。  
宿到着十七時、一同元氣、  
入浴後夕食は二膳付で料

理は豊富サービス満点!!  
翌朝八時出発三河湾沿い  
に吉良の里に向う。先ず最  
初に講談「荒神山」で有名  
な吉良の仁吉の為に清水の  
次郎長が建てた墓のある源  
徳寺を訪れ本堂にて遺品を  
拝見、墓に詣で続いて人生  
劇場の里作家尾崎士郎氏の  
誕生の家、庭内に記念碑が  
建立されている。見学後尾  
崎家を辞し吉良町岡山に在  
る忠臣蔵敵の主役吉良上野  
介義央の墓がある華蔵寺を  
訪れ本堂に参観、住職不在  
の為奥さんが寺についてい  
る/と説明して下されそ  
の上特に本堂の小堀遠州作  
と云われる枯山水観賞式庭  
園、池大雅筆の襖絵(重文  
)は収蔵庫に保管されてい  
るが拝観出来なかつたがそ  
の外貴重な遺品等を見見、  
霊屋及吉良家の墓に詣で次  
に予定外の万灯山長円寺、  
こゝは有名な京都所司代板  
倉勝重の菩提寺であり又三  
河三十三番観音満願札所、  
三河七福神布袋袋尊札所  
この寺を訪れ本堂に安置さ  
れてある布袋尊、桐の木  
一木彫り等身大の坐像、し  
かも子供をだかれた珍らし  
い布袋尊を拝観感無量の中  
に寺を辞し最後の豊川稲荷  
に向う。時刻は丁度十時四  
十四分、頗る順調に見学が  
出来たのは我々の車に宿の  
番頭さんが添乗案内して

くれたお蔭であつた。  
長円寺―豊川稲荷間所要  
時間一時間十一時四十五分  
に到着中食後稲荷さん参拝  
は自由行動出発を十三時三  
十分としたが相憎雨が降り  
り出したが幸運にも計画し  
た見学地は全部消化した後  
でほんとうに恵まれた史跡  
めぐりであつた。  
豊川インターより一路雨  
の東名高速道お東進途中牧  
ノ原S・A小休止、大井松  
田迄直行する予定が、当日  
たま〜御殿場、大井松田  
間工事の為交通止め、やむ  
なく沼津より箱根越えのル  
ートに変更箱根の頂上附近  
で濃霧に襲われしばしば肝  
を冷すようなシーンを繰り  
返すと云うスリルを味わい  
ながら山越えをし恙がなく  
一同元氣に小田原駅前十七  
時十分到着解散。  
今回の見学地を後日の参  
考ともと資料によつて記し  
てみよう。

①岡崎城(岡崎市康生町)  
三河の守護代西郷正左  
エ門頼朝が康正元年(一四  
五五)に築城完成、応永四  
年(一五二四)徳川家康の  
祖父松平七代清康に城を譲  
り、松平氏の居城となり以  
来、代々松平氏(徳川氏の  
旧姓)の本拠の城となつた  
別名竜ヶ城という。  
天文十一年(一五四二)  
十二月二十六日不世出の英

傑松平竹千代(後の徳川家  
康)が城内で呱呱の声をあ  
げた。城域は八一、二〇〇  
平方米。  
岡崎城は「東照神君出生  
の城」「徳川幕府発祥の地  
」として代々譜代の臣が城  
主となり、知行は僅かでも  
権勢を振つた。  
明治六年(一八七三)に亘つて  
城郭は取り壊されたが、  
昭和三十四年三月三十日三  
層五階の天守閣と井戸櫓、  
附櫓が八十六年ぶりに復元  
された。今は岡崎公園とな  
る。三重天守閣(復元)、  
東照宮、産湯井戸などがあ  
る。  
②伊賀八幡宮  
岡崎市伊賀町字東郷中八  
六に鎮座、徳川家代々の祈  
願所である。  
祭神は応神天皇、仲哀天  
皇、神功皇后、徳川家康  
由緒  
伊賀八幡宮は、文明年間  
(約五〇〇年前)に松平四  
代親忠が伊賀国(三重県)  
から、下井田の地に移し祭  
つたのがはじまりである。  
その後下井田の地名を伊賀  
と改めた。それ以後ずっと  
松平家(徳川家の祖)徳川  
家代々の祈願所となつたの  
である。  
八代広忠公は、天文四年  
(一五三五)十二月、織田  
信秀が岡崎城を攻めとらう  
としたとき、八幡宮に祈願

して、井田ヶ原に迎えうっ  
た。そのとき、先頭の馬に  
乗った武者が現われ敵陣め  
がけて白羽の矢を放つた。  
すると、八幡宮の森の上か  
ら黒雲がわき、あらしを呼  
んで、白羽の神矢が雨のよ  
うに敵陣に飛んだ。たちま  
ち、三万余の敵は敗退した  
広忠公は、自らその神矢を  
拾つて八幡宮に奉納した。  
家康公も、尊敬の念極めて  
厚く、出陣には必ず祈願  
した。関ヶ原の戦いや大阪  
の陣には、神殿が鳴動した  
りするなど、不思議なこと  
が起つた。また桶狭間の戦  
に利なく軍を引きかえそう  
としたとき、矢作川に八幡  
宮の神使の鹿が現われて、  
家康公は無事に大樹寺には  
いることができた。こうし  
て、八幡宮は松平家、徳川  
家の守護神として、尊敬を  
あつめていたのである。社  
殿の造営はたび〜行なわ  
れ、広忠公の天文年間、家  
康公の永祿年間、家光公の  
寛永年間の造営がその主な  
ものである。現在の社殿の  
大部分は、寛永十三年(一  
六三六)の造営である。  
昭和八年になつて、神殿  
拝殿、御供所、隨身門、神  
橋、鳥居などが、国宝(重  
要文化財)に指定された。  
社殿は、江戸初期の建築の  
代表で、江戸時代の神社配  
置形式をよく残しているの

である。重要文化財

○石橋

江戸初期の、中国の影響を受けた他の石橋とちがい全く独自の手法によって、木造建築の形をそのまま表わしている。

○隨身門

左右に隨身(神像)を安置しているの、隨身門という。入母屋造りの松皮葺で、下層が広く、上層が割合に低くて、その約合いが甚だ美しい。入母屋破風の破風板に青海波を刻んだ点

が変っている。○本殿、幣殿、拜殿

本殿と拜殿をたてに並べその間に幣殿をはさんで一連となる。いわゆる権現造りである。尚権現作りの本殿は入母屋造りが普通であるが、当八幡宮は流れ造りになっていてめずらしい。

○御供所

社殿以外の建築で古いものが残っているのは、外に日光東照宮、上下賀茂神社六所神社を教えるだけである。

宝物

○棟札(四枚) 重要文化財指定

○縁起書(正保二年(一六四五)正月松平志摩守重成奉納)

○戸帳(綿地、家康公奉納白筆)

○御宸筆(紙地、御陽成天皇御宸筆家康公奉納)

○鏡(銘天下清水丹作親忠公奉納)

○大鏡(寛永十五年(一六三八)酒井備後守忠朝奉納)

○牛切剣(銘飛彈守藤原氏房作)

○(熊植毛前立兎耳松平親忠公奉納)

○弓(松平清康公奉納)

○箭(白羽神矢松平広忠公奉納)

○刀(銘三条吉則作葵御紋付徳川家康公奉納)

○茶碗(松平親忠公奉納)

○茶碗(大久保彦左エ門陣中使用)

○輔物 刀、長刀、劍、鎗

種子ヶ島、鉄砲以下略す。

③大樹寺(岡崎市鴨田町)

浄土宗、松平家、徳川家の菩提寺として有名、成道山松安院と号し、文明七年(一四七五)松平四代親忠(家康より六世の祖)の創建したものである。

本尊阿彌陀如来は鎌倉末期の作と云われ光背に千仏を宿すところから別名、一光千体仏とも云われ、円満の相好は拝する者をして清浄の信心を起さしめる。

開山勢誓愚底上人は松平親忠に浄土の奥義、化他五重を相伝したところから、この寺は浄土宗の五重相伝

根源道場として知られている。

家康十九歳の時、桶狭間合戦により、今川義元が倒れたので身の危険を感じ、大高城から大樹寺に逃れ、住職登善上人に先祖の墓前で自害すべく覚悟のほどを表わすと上人の言葉は「厭離穢土、欣求浄土」の経文

―戦国乱世の世を住みよ、浄土にするのがお前の役目―と訓し、悩める家康を翻意させ、家康はこの八文字を終生座右の銘とした。又この時家康を追う野武士の一隊が大樹寺を囲んだが、寺僧の一人祖洞和尚が門の

カンヌキを引き抜いて打って出て、七十人力で阿修羅の如く戦い、敵を退散せしめた。後に家康はこのカンヌキを開運貫木神と命名、今も大樹寺に安置されている。

家康の人生観の確立と一代の危地を救った大樹寺は家康の遺命の一条に「位牌は大樹寺に祀るべきこと」とあるにより、徳川歴代將軍の等身大の位牌が安置されている。(大樹寺縁起書より)

重要文化財

(1)多宝塔

天文四年(一五三五)松平清康建立、一層は方形、二層は円形の格調高い多宝塔である。

(2)山門(県指定文化財)

寛永十八年(一六四一)三代將軍家光公建立、楼上に後奈良天皇宸筆「大樹寺」の勅額(重要文化財)が掲げられている。また釈迦三尊十六羅漢を安置してある。

(3)鐘楼(県指定文化財)

寛永十八年(一六四一)三代將軍徳川家光公建立、楼上の大鐘は九代將軍家重公改鑄の名鐘である。

(4)襖絵(重要文化財)

安政四年(一八五七)土佐派、冷泉為恭の大作で平安時代、円融天皇、子の日の御遊園で(四六面)ある外に為恭の絵一〇〇面がある。

④ 幡豆観音(幡豆郡幡豆町東幡豆森)

当寺は天平年間行基菩薩の開基にして天文年中利春僧都が再興、寺号を西林寺と称す。時下り天正十四年(一五八六)小笠原越中守母堂心秋妙禅尼追善菩提の為仏供田を寄進、堂塔伽藍を修復する。時に源正恵空大徳が住職。その後法蔵寺十一代教翁長安上人が隠栖ついで寛政年間、梅翁恵秀上人が住職となり領主の許可を得て心秩山妙善寺と改称せらる。よって梅翁恵秀上人を開山とす。

五代芳山上人、性海山心秋院妙善寺と改め諸堂を改築、十二代道翁上人本堂を

再建、十一面観音五尺二寸の像安置、鎌倉期の作にて通称中風除け、三河ぼっくり様として諸人の信仰を集めている。(縁起書より)

第二日見学地

①源徳寺(吉良町横須賀)

浄土真宗、信道山源徳寺任侠吉良仁吉の墓が在る清水次郎長が仁吉供養の為墓を建てた。

②人生劇場の里(吉良町横須賀)

作家尾崎士郎氏の誕生の家が現在残っている。氏の作品「人生劇場」の物語りがこの地から初まるので有名。庭内に記念碑がある。

③華蔵寺(吉良町岡山)

華蔵寺は吉良町岡山の地にあつて、なだらかな丘の麓にある臨済宗妙心寺派の禅寺で、山門前に「吉良義央遺跡」と刻まれた大きな石碑がある。

山門を入り、急勾配の石段を登ること二十数段。扁額に「華蔵世界」と書かれた中門をくぐると本堂を中心に左は吉良家の霊屋(みたまや)と墓地、右に庫裡と書院座敷、そして門の石脇に朱塗りの鐘楼がある。庭園は本堂の裏手にあつて江戸時代中期に作庭されたと云う枯れ山水観賞式庭園。面積は約七百平方メートル。面積は約七百平方メートル。山王山山畔の地を利用した

庭で、山腹には枯れ滝を組んで、下部を枯流れとし、平庭は枯れ地としての表現で中央に亀島を設けている左手の出島は鶴島で雪見灯ろうをすえ、上部は三尊石組、そして出島から山畔へ自然石の橋を架けて廻遊路をつけ全庭に大小無数のサツキの刈り込みを配して、深山幽谷の景観を美事に表現している。

華蔵寺は金星山華蔵寺と称し真言宗であつたと云う貞和年中(一三四五〜一三九九)に一峰明一禅師が住持したといひ、以前は花蔵寺村(現西尾市)にあつたと伝えられている。吉良氏は鎌倉時代から西尾の実相寺が菩提寺であつた。義定

のときに華蔵寺を建てて菩提寺とした。慶長五年(一六〇〇)に吉良義定が先考追福の為に片岡山華蔵寺に改めた。義冬の時禄三一石と山王山を寄進した。

吉良義央は父義冬が寛文八年(一六六八)に六十一歳で没したので、父の冥福追善のため田地一反七畝七歩九合を寄進。翌九年に京都の妙心寺より天英和尚を招聘して華蔵寺四世とした

元禄三年(一六九〇)義央五十歳のとき、本堂の西に霊屋を作り、吉良氏で従四位上に叙せられた義定、義安、そして自像を安置し

た。また梵鐘もこの時の寄進で、惣司に齊藤金右エ門忠行、副司に齊藤伊左エ門直次が当たったと記録されている。

○重要文化財

池ノ大雅筆襖絵(重文)  
④長円寺(西尾市貝吹町)

長円寺の開基板倉勝重公は三河の出身で幼いときに出家し、諸国を歴遊して禅の修業をつみ長円寺の前身の永安寺に住したが、家康

度々の請によって還俗し、幕府草創の時期に当って譜代の臣として活躍し、駿府の町奉行をはじめ小田原奉行、関東代官、江戸町奉行を兼、京都町奉行、次いで京都所司代職が設置されると初代の所司代として抜擢され、十九年間にわたりこの要職にあつて、名所司代のをうたわれた。

勝重公は慶長初年(一六〇〇)永安寺を中島山長円寺と改称し、本光寺八世仙麟長膳禪師を請して開山とし、板倉一門(大名四、旗本二)の菩提寺と定め、次いで二代重宗公は寛永七年(一六三〇)寺を隣邑の万灯山麓の地(現在地)に移転し新たに堂塔伽藍をいとなんで山号を万燈山と称し、肖影堂に勝重公の木像を安置の板塚太祖勝重公の墳墓の地とした。

長円寺は寺領として境内山林約五十町歩、東焼山、西薬師山、南方灯山、北弥勒山の四山に囲まれ、総門山門、法堂、肖影堂、開山堂、庫院、僧堂、衆寮、江湖寮、鐘樓等ほとんど禅宗の七堂伽藍形式を完備し、曹洞復古の名僧月舟和尚の住山におよび修業の雲柄多く集り東海の法窟と称された。

廟所には勝重公を祭る肖影堂を中心に、長子周防守重宗公(二代京都所司代)次子内膳正重昌公(島原の乱に討死)、内膳正重矩公(老中、所司代)、伊賀守松叟公(老中)など一門の人々が祭られている。

○肖影堂  
方三間の宝形造りで濡縁をめぐらし、創建当時は丹塗り、寛永七年(一六三〇)の建立で、中に祭る勝重公の本像はさながら生けるが如く英傑の倂を今にとどめている。「肖影堂」の額の字は石川丈三筆。

○十一面観音菩薩の尊像  
古仏を胎中にした本尊で江戸初期造像、三河三十三観音霊場の満願第三十三番に当り、内仏の十一面観音菩薩は菅原道真公一刀三礼の霊仏で、元中島山長円寺の本尊。

○布袋尊等身大坐像  
かつて奥州福島城主板倉勝頭公が霊夢を見、仏前に命じて桐の木の本彫り等身大の坐像を造らせ、板倉家の福の神として祭られていたが、後に菩提寺の長円寺に奉安された。布袋様は弥勒菩薩の化身と云われ、日本では七福神の一人と数えられ、その福徳圓滿のお

五十七年度の行事計画を五月の定例理事会に計り次のように実施することに決定したので報告いたします

五七年度行事実施計画 香川 政治

- 五月の定例理事会に計り次のように実施することに決定したので報告いたします
- 六月
- 六月二十三〜二十四日の両日、一泊二日
- 第二回信州(諏訪、松本、高遠)方面史跡めぐり
- 七月
- 講演
- 八月
- 甲州方面名社、名園めぐり 日帰り
- 見学地
- ①忍野村―忍野八景
- ②塩山市―於曾甘草屋敷
- ③塩山市―熊野神社
- ④塩山市―放光寺(愛染明王重要文化財)
- ⑤塩山市―久保八幡社
- 九月
- 講演
- 十月
- 浜松、浜名湖周辺史跡めぐり 一泊二日

見学地  
①西光院(徳川家康前夫人築山殿墓所)  
②新居の関所(今も昔のままの建物が残っている)  
③本興寺(襖絵と庭園が有名)  
○弁天島温泉泊り  
第二日目  
①大福寺 本尊薬師如来  
②井伊谷宮  
宗長親王を祭る  
③龍潭寺  
井伊家発祥の地、井伊谷にあり、庭園の素晴らしさで有名。江戸初期、小堀遠州の作庭。本堂内の彫刻は左甚五郎の作といわれる。  
十一月  
講演  
十二月  
行事なし  
五十八年一月  
新年初詣でを身延山久遠寺  
本遠寺

身延町大野に在り大野山本遠寺。徳川家康の愛妾お万の方養珠院が開山日遠上人のために建立寄進された三月  
○三重県伊賀上野、柳生の里、奈良方面史跡めぐり  
二泊三日  
見学地  
第一日目  
伊賀上野城(忍者の里、と呼ばれる伊賀国は、山に囲まれた九里四方の小さな盆地、その中心は上野市である。街の北側の丘には、白亜三層の伊賀上野城が、静かな雰囲気を感じながら端麗な姿を見せている)―忍者屋敷(この屋敷は、伊賀国高山村の土豪高山太郎次郎輩家の居宅といわれ、屋敷内には、忍者独自の仕掛が巧妙に施されている)―芭蕉翁生家(表は格子構えの古い町屋で土間は奥まで続き、邸内の釣月軒は処女句集「貝おほひ」を執筆す。

したところ)―鍵屋の辻(伊賀越え道中双六など浄瑠璃、旗舞伎に上演された荒木又右衛門尉の仇河合又五郎を討った旧跡)―伊賀くみひもセンター見学(伝統的工芸品)―上野泊  
第二日目  
柳生の里―月ヶ瀬深谷―大柳生―柳生町―奈良東大寺―薬師寺(五重ノ塔)―奈良泊り  
第三日目  
長谷寺―室生寺―今井町―茶人今井宗久生家―東大阪IC(近畿自動車道)―吹田IC(名神高速道)―名古屋IC(東名高速道)―大井松田IC―二五五号―小田原駅前解散。  
以上月別に行事を列記したが実施の際は日時その他詳細は前々月の理事会に計り御案内を致します。その節は会員の皆様お誘い合せの上多数御参加を切望します。

姉妹都市今市市 訪問の旅 香川 政治

(昭和56年10月20日)21日 一泊二日)  
コース  
第一日(10月20日(火))  
小田原八小堂書店前(七)文化懇談会、市内史跡めぐり  
時々厚木バイパス(厚木)東名高速道(東京)川口(東北自動車道)宇都宮(中食)今市十三時三十分  
文化懇談会、市内史跡めぐり

り、今市十七時、鬼怒川温泉十七時三十分 宿泊  
 第二日10月21日(水) 鬼怒川温泉 八時出発、大谷石の里、鹿沼インター、東北自動車道、佐野、足利市(中食)、館林市、東北自動車道、東京、東名高速道路、大井松田、小田原駅前(解散)

秋もたけなわの候小田原文化団体連絡協議会は時あたかも第二八回小田原市民文化祭を文化団体連絡協議会と市教育委員会主催で10月17日(土)~11月29日(日)まで開催、その一環として姉妹都市として提携した栃木県今市市との文化交流を目的として10月20日、21日の両日今市市を訪れ今市市文化団体連絡協議会員との交歓及び二宮尊徳先生の遺跡並にその附近の史跡を見学することを計画し我々史談会会員の一人としてこの一行に参加当日各団体の代表その所属する会員(希望者)42名及び市教育委員会職員2名計44名、バス一台、好天に恵まれ小田原駅表口八小堂書店前集合午前七時出発前掲のコースにて東京までは順調都内に入ると相変らず車、車のラッシュで都内を抜けるに時間の浪費甚だしく宇都宮に予定の時刻を約一時間も遅れ中華料理のドライブイン大晃での

食事もそこ、に12時50分今市市に向う。  
 今市市交歓会々場の報徳振興会館13時20分着直ちに会議室にて活発な意見交換を互に行い続いて今市市の文化財保護特別審議会議長森 豊氏の報徳仕法その他遺跡にいて詳細な説明をされた後現地を自ら案内され、二宮神社、尊徳の墓、報徳文庫、如来寺等見学、森氏は微に入り細に亘り説明されその御苦労を感謝しつゝ別れを告げ16時30分第一日の見学を終り今日の宿泊地鬼怒川温泉場に向う。

あさやホテル17時に九階建ての豪華なホテルに着き今日一日の旅の疲れを癒す第二日目  
 前日の晴天と変わり今日はどんよりとした曇り空、ホテルを八時出発再び昨日の道国道一二一号線を鬼怒川沿いに美しい溪谷を眺めながら今市市を経て日光宇都宮バイパスを宇都宮へ！  
 宇都宮より坦々とした大谷街道を走り道端には大谷石の家や土蔵、塀などが目立ち、石問屋が並んでいて、大谷石の産地に入ったような感じをうけながら進む、大谷石は天平年間(七二九~七四八)の国分寺建立に使用されたと云われているから石材としての歴史は古い。また帝国ホテルは大谷

石を材料として建築されていたことなど建築用材や、装飾用としても利用価値は高いわけである。寺の前でバスを降りるとすぐ正面に二丁の自然石に飛田朝次郎が彫刻した平和観音の巨像が見える。これは第二次大戦の戦死者の霊を弔う永遠の平和を願って昭和二十六年に建てられたのである

周囲が絶壁の中の平和観音は犯されることのない豊かな安らかな表情をされておられ、二度とあのような不幸な戦争が起らないことを祈りながら大谷石のトンネルをくぐり「普門閣」という額のある山門を入り「重要文化財、特別史跡大谷の石仏」についての概略を記した掲示が正面に在り、拝観料を支払い更に進むと小山の下に、その頂きがおいかぶさるような岩壁に接して、木造の本堂がありその左手の壁に沿って脇堂がある。  
 堂内に入ると、弘法大師作と伝えられる大谷石に彫り出した四・五膝余りの、すんなりした千手観音の立像が灯明に照し出されている。柔らかい大谷石に彫られただけに、面相ははつきりしないが、無量円満な姿をたゝえた千手観音だが尊容は損じても千手観音のものが感に心打たれ乍ら本堂

に続いて脇堂には壁面に傾斜した壁面に大きな釈迦三尊が彫られ、その光にはたぐましい薬師三尊更に阿彌陀三尊と続く。これらの石仏は何れも最古優秀な技巧によって、制作された磨崖仏並に約七千年前の人骨縄文初期から弥生時代に至るまでの土器、石器、獣骨など見学する。  
 九時五十分寺を辞し再び車上の人となり鹿沼街道を走行鹿沼インターより東北自動車道を佐野インターへここより国道五〇号線に入り足利市に進め十二時に市内に入り鏡阿寺及足利学校見学中食は織姫公園内のサンフィールドにて摂り十三時五十分出発館林市に在る文福茶釜で有名な茂林寺、最後の見学地向い十四時五十分茂林寺到着、予定時刻も大巾にオーバーアード急ぎに見学をすまし館林インターより東北自動車道を帰路につく。東京都内に入ると相変らず車の渋滞、ノロノロ運転が渋谷の合流点まで続き漸く東名高速道より車の流れは順調、海老名のサービスエリアにて小憩小田原駅前十九時到着、一同元気に解散。以上のように姉妹都市今市市との文化交流と研修の旅を有終の美を飾ることができた。

見学地

(一)報徳二宮神社  
 報徳二宮神社は栃木県今市市に在り、祭神二宮尊徳命、富田高慶命(尊徳の弟)を祀り、尊徳翁は天明七年(一七八七)七月二十三日小田原市栢山に生まれ、続く大飢饉に加えて酒匂川の二度に亘る大洪水に田畑の大半を流失する悲運に十四歳にて父に死別、十六歳で母を失い、二弟と離散する最悪の困窮に陥った。この境遇の中に不撓の刻苦精神によって、二十四歳のとき独力で一家の再興を成就した。この努力の間に創案した報徳の生活様式によって、小田原藩家老服部家の復興を手始めに、桜町仕法より全国的に興国安民の報徳仕法が浸透し、公私領六〇〇余村に貢献し直接指導を受けた門人は千四百六十四人に達した。

老中水野忠邦に幕臣として登用され、後に御譜請役に昇進した。晩年の嘉永六年(一八五三)幕命により日光御神領八九ヶ村の荒地一千町歩を開発し、復興する仕法に尽瘁した。三十年計画の三年目、安政三年(一八五六)十月二十日享年七十歳で今市報徳役所にて逝去し惜しまれた。  
 十月二十三日星願山如来寺にて葬儀を営み、その墓地に埋葬した。「史蹟、二

宮尊徳墳墓」として、栃木県より指定された。  
 日光仕法は、その嗣子、弥太郎(尊行)が継承し、高弟の富田久助(高慶)始め諸門人が尽力し、日光仕法雛形(六四巻)に準拠して、実施期間を遙かに凌いだ成果を上げた。慶応四年(一八六八)戊辰戦争の激戦地と化し、やむなく終止した。

明治二十四年(一九一一年)十一月十六日、生前の偉大な功業を追賞され、特旨を以て従四位を贈られた。  
 宇宙の大法に則した興国安民の報徳の原理は、古今東西を通じて不滅の理念であり、数多の実践によって実証されている。抜きん出た農政家、勝れた哲学者、正しい民主主義の人道実行者であり、世界に誇る偉人である。多大の恩恵に浴し遺徳を敬仰する地本及び関係ある人々が、全国唯一の終焉の地である由緒を有するこの靈地に、神社を創建した。明治二十六年(一八九三)起工し、同三十年社殿を竣工して、三十一年十一月十四日鎮座祭を執行し今日に及んでいる。と縁起書に記されている。  
 二宮尊徳の墓(栃木県指定史跡)  
 二宮神社本殿の裏手に在る。安政三年(一八五〇)旧曆十

月二十日(太陽曆十一月十七日)午前十時(巳ノ刻)永眠せられた。尊徳翁の遺骸は朱と塩で瓶に漬けて、椀の二寸板の立棺とし白張二十四名が担いだ。相馬、桜町よりも馳せ参じた四百余人の葬列は、報徳役所のある春日町より如来寺入口まで続き、その恩徳の広大さを示した。如来寺本堂に於いて、十ヶ寺の僧徒による盛大な葬儀を執行し、手厚く埋葬された。

本殿裏にある墓は供養塔で尊徳翁の遺言と墓の左横に左記文面の墓碑建立の理由を記された建札が建てられている。

記

◎翁の遺言  
翁疾病に伏し、門弟子を呼んで曰く「鳥の將に死せんとするや、その鳴くや悲し。人の將に死せんとするや、その言うや善し。慎しめや、慎しめや小子、倦むこと勿れ。」

「我が死に近きにあらん。我を葬るに分を越ゆること勿れ。墓石を建つること勿れ。碑を建つること勿れ。只々土を盛り上げて、その傍に松か杉を一本植え置けば、それにて可なり。必ず我が言に違ふ勿れ」と遺言された。

忌明けの安政四年に門人間に墓碑建立の議が起り是非の意見が区々として容易に決定せず、遂に翁の未亡人の意志を伺って建立したと板碑に記されている。

法名 表「誠明院功普報徳中正居士」  
裏「二宮金次郎尊徳之墓、安政二年丙辰十月廿日建之安政五年四月六日」

報徳文庫は本殿裏に高床式校倉造り、構造二階建、鉄筋コンクリート、屋根切妻建坪三六坪(報徳仕法全書二千五百冊及び遺書、遺品展示、報徳図書館兼用)

(一)如来寺  
二宮神社に隣接しており浄土宗星頭山如来寺は古い寺で、室町幕府衰亡期の文明年間(一六〇〇)に晝替最勝和尚が開創したと伝えられ本堂に木造地藏菩薩立像が安置されており古くより子育て地藏として信仰を集めている。尊徳先生の菩提寺でもある。

三代將軍家光、日光参拝の折寛永九年(一六三三)四月十六日宿泊の名刹である。  
(二)報徳役所跡  
今市春日町に在り敷地百坪内に報徳役所六十坪、書庫十坪、板倉十二坪、長屋四十九坪、日光御神領仕法、十五年間の中心地であり尊徳翁はここに一年半居り、安政三年(一八五〇)十月二十日尊徳翁が七十歳で歿した陣屋跡で、現在の建物は昭和三十年歿後百年祭のとき建築されたもの。

二宮堀は尊徳指導による用水堀で日光仕法最初の最大の用水として有名で、全長二四七八五間、人足数一〇八六八、経費四八兩二分二朱、嘉永七年(一八三〇)七月二十二日竣工(十七日間)和泉、平ヶ崎、千本木、三ヶ村の田畑完成に資し、灌漑用水として貢献した。流域の一六三戸八五七人の生活を向上させた。

平ヶ崎村に嘉永七年(一八五四)六月二十四日、日光奉行所役人、三ヶ村世話人の名を刻んだ水神碑を建立されている。

天開山大谷寺は栃木県宇都宮市大谷に在り坂東三十三番の第十九番の札所として又日本最古の石仏の寺として知られ現在の本殿「観音堂」は元和年間(一六一五-一六二三)日光門主天海大僧正の法弟、伝海僧正によって、奥平龜姫(徳川家康の長女)の援助のもとに再興されたもので堂内岩肌に磨崖仏として本尊千住観音像が刻まれている。鍵なりに曲がると別棟の側室に同じように岩肌に釈迦三尊、薬師三尊、阿弥陀三尊の十軀の石仏が刻まれている。

何れも国宝でかつ重要な文化財の指定をうけている本尊は高さ四・五尺余り宝物館には大谷観音岩陰遺跡出土人骨(二千年前)横臥屈葬の姿が見られる、この人骨は年令二十歳前後、身長一五四・六センチの男性で、昭和四十年四月、特別史跡、重要文化財大谷磨崖仏防犯工事中、お堂下約一五〇センチ位の地下より出土したもので、私たちが日本人のはるかなる祖先の姿を知るのに貴重な資料である

この遺跡は約一万年前縄文時代草創期から約二千年前弥生式土器時代に至る約八千年の永きにわたっての住居跡であったことが判明し、大谷寺洞穴(又は岩蔭)遺跡と命名された。

足利市昌平町に在り日本最古の総合大学として有名で、学校の創立については平安時代の初期、小野篁の創立といわれ、校長には代々禅僧があたり、儒学、易学、漢方医学等を教えた。

第七代九華の時代(第十六世紀中葉)に学校は最盛期を迎え生徒三千人を数え宣教師フランシス・ザビエルや、ルイス・フロイスもその盛況ぶりを世界に伝える。現在の足利学校は聖廟、入徳門、学校門を残すだけ

となつているが敷地内には遺跡図書館、小学校等がある。現在でも学問のメッカの感がある。

足利学校の敷地一万六千方餘と聖廟及び附属の建造物は大正十一年(一九二二)史跡として国の指定をうけ、図書館には当時の古書一万二千冊中の文選二十一冊は小田原北条氏が収めたもので国宝に指定保存されている。

ばん阿寺は足利学校の北に隣接しており、足利氏の館跡で、敷地四万平方餘ある史跡の周囲を水堀がめぐり、市街地にあるにもかかわらず静かなただずまいをみせている。

足利義兼がここに居館を構えたのが始まりで、当寺の特色は堀内に土壘が築かれ、東西南北にそれ、山門があり平城の形態をもった鎌倉時代の武家屋敷の面影を現在に伝えている。

現在のばん阿寺には本堂や鐘楼、一切経堂などの遺跡のほか公園が併設され、木々も多く、和洋庭園、遊園地等があり市民の憩いの場となつている。

寺には宝物多く皆文化財本堂、鐘楼は国の重要文化財、一切経堂、東西両門、楼門、多宝塔、校倉宝庫等重要文化財の指定を受けて

いる。「ばん阿寺」は足利氏の邸宅であったが、出家した足利義兼が、大日如来を祀り自らも大日如来の梵語読である「鏝阿」と名乗っていた。足利の人達に「ばん阿寺」を「大日様」として親しまれている。

館林市茂林寺は応仁二年(一四六八)青柳城主赤井昭光の開基で分福茶釜の狸寺で有名、参道の両側に大小の狸像は壯観である。

分福茶釜の縁起を記してみよう!  
青竜山茂林寺の開山大林正通禪師に随い応永三十三年(一三三〇)伊香保より来て代々の住職に仕えた守鶴和尚は、元龜元年(一五〇二)夏、七世世舟和尚の代に千人法会があり喫茶の用に供する湯釜がなくて寺で困っていた際一夜の中に一つの茶釜を持って来て、茶堂に備えた所が不思議に常に汲んでも湯が尽きなかったため、衆人はその無尽蔵の妙術に驚かない者はなかった。和尚は自らこの茶釜を紫金銅分福茶釜と称した。その後十七世天南和尚の代まで一六一年間当山に居つたが天正十五年(一六二七)二月二十八日漂然と寺を去って行方が判らなくなった。後世守鶴和尚は狸の化身だと伝える。

足利市昌平町に在り日本最古の総合大学として有名で、学校の創立については平安時代の初期、小野篁の創立といわれ、校長には代々禅僧があたり、儒学、易学、漢方医学等を教えた。

第七代九華の時代(第十六世紀中葉)に学校は最盛期を迎え生徒三千人を数え宣教師フランシス・ザビエルや、ルイス・フロイスもその盛況ぶりを世界に伝える。現在の足利学校は聖廟、入徳門、学校門を残すだけ

となつているが敷地内には遺跡図書館、小学校等がある。現在でも学問のメッカの感がある。

足利学校の敷地一万六千方餘と聖廟及び附属の建造物は大正十一年(一九二二)史跡として国の指定をうけ、図書館には当時の古書一万二千冊中の文選二十一冊は小田原北条氏が収めたもので国宝に指定保存されている。

ばん阿寺は足利学校の北に隣接しており、足利氏の館跡で、敷地四万平方餘ある史跡の周囲を水堀がめぐり、市街地にあるにもかかわらず静かなただずまいをみせている。

足利義兼がここに居館を構えたのが始まりで、当寺の特色は堀内に土壘が築かれ、東西南北にそれ、山門があり平城の形態をもった鎌倉時代の武家屋敷の面影を現在に伝えている。

現在のばん阿寺には本堂や鐘楼、一切経堂などの遺跡のほか公園が併設され、木々も多く、和洋庭園、遊園地等があり市民の憩いの場となつている。

寺には宝物多く皆文化財本堂、鐘楼は国の重要文化財、一切経堂、東西両門、楼門、多宝塔、校倉宝庫等重要文化財の指定を受けて